

---

# 魔法の国のティカ

館野寧依

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法の国のティカ

### 【Nコード】

N0634BA

### 【作者名】

館野寧依

### 【あらすじ】

佐藤千花（16）はどこにでもいる普通の女子高生……のはずが、ある日突然、自転車ごと魔法大国ガルディアに異世界召喚される。たまたま膨大な魔力を宿していた振り回され体質の主人公が魔術師の弟子になって、なぜか城でお姫様生活をしたり、自転車で異世界観光したり、ツンデレ師匠の束縛紛いの監視の下、王子や騎士達に囲まれてうるたえたりする、ちょっと非日常な異世界生活を綴ったファンタジー・ラブコメディ。

「あー、アイス食べたい。アイスアイスアイス」  
残暑厳しい夏休み。

佐藤千花は無性に高級アイスが食べたくなって連呼した。

今外に出たら暑いだろうなー。あー、でもアイス食べたい。

少しばかり迷った後、結局千花は近くのコンビニまでアイスを買  
いに行くことにした。

「千花ー、どこ行くのー？」

二階の部屋から階段を降りていくと、リビングにいる母親から声  
をかけられた。

「ちょっとコンビニにアイス買いに行ってくる」

「それなら、ついでにいちごのかき氷買ってきてよ」

「うん、分かった。行ってくるね」

千花は頷くと玄関を出る。

「……あつっ〜……蝉うるさー……」

文句を言いつつ、軒下に置いてある自転車を取りに行く。

照りつける太陽の下、自転車を漕いで三分ほどのコンビニに着く  
と、千花は目指す高級アイスとかき氷を手に入れた。

自転車のかごにコンビニのビニール袋を放り込むと、千花はアイ  
スが溶けてはかなわないと速攻で自転車を走らせる。

すると、目の前にきらきら光るものが見えてきた。

やだ、ガラス？ 避けないとパンクしちゃう。

千花はその場所を避けようとハンドルを斜めに向けようとしたが、  
なぜかそれが出来ずに自転車は直進する。

「ええ？」

今度はブレーキを思い切り握った。……がそれも効かずに自転車は更に加速した。

「うええ！？」

思わず千花の口から素っ頓狂な声が漏れる。

なにこれ、チャリ壊れた！？

自転車はきらきら光るものに当たるといきなり停止した。

「おおおっ！？」

放り出されるかと思って、千花は女子にあるまじき声を上げる。

しかしその衝撃はなく、真下にあるきらきら光るものがいきなり円を描いた。

次の瞬間には光の洪水が来て、千花は思わず叫んだ。

「な、な、なにこれーっ！？」

光の洪水が治まると、千花はまったく見知らぬ場所にいた。それも、どう見ても室内。

千花が呆然としてみると、目の前の淡い金髪で水色の瞳の男は自転車のかごからコンビニ二袋を取り出した。

緩く波打つ背中の中程まで長髪。顔は超絶美形と言っていると思う。千花が今までお目にかかったことがないような美形だ。けれど、この衣装はなんだろう。まるでファンタジー映画に出てくる人のようだ。

千花がぼーっと見とれていると、超絶美形はおもむろにアイスを食べ始めた。そこでやっと千花ははっと気づく。慌てて自転車のスタンドを立てると男に向かって叫んだ。

「ちよっ、わたしのハゲ抹茶！勝手に食べないでよ！」

「禿マツチヨ？ おかしな名前だな。もう一つあるだろう、それを食べる」

「なんであんたに指図されなきゃいけないのよ、禿ドロボー！」  
楽しみにしていたアイスを奪われ、更に上からの男の物言いに千花は頭に血が上る。

「おまえは目がおかしいのか？ 俺は禿げてない。……ああ、頭がおかしいのか気の毒にな」

「なんですってえええっ」

あまりの言われように、千花は思わずきいっと叫びたくなる。

「いらぬのならそちらも俺が貰うが」

「！ 食べる、食べるわよっ」

千花は慌てて男からコンビニ袋を奪い返した。そして溶けかかったいちごのかき氷をかきこむ。

「う」

頭にきーんと衝撃が来て、千花は思わず呻く。

「やはり馬鹿だな」

心底馬鹿にしたような男の表情に千花はむかむかした。

「うるさいよ！」

一声叫ぶと千花は目の前のかき氷にとりあえず集中することにした。

かくして、室内には不似合いなママチャリを挟んで、見た目フアンタジーな男と千花がアイスとかき氷を食べているというおかしな構図が出来上がったのである。

千花がかき氷を食べていると、四十代ほどの男性が室内に現れた。なにか突然出てきたような気がするのだが、千花の気のせいだろうか。

『カイル、召喚魔法をやたらと使うなと言ったはずだが。またおまえは使ったのか』

千花のアイスを奪った男に文句を言っているようだが、なんとなくべつているのか千花には理解できない。

「……………誰？」

短い茶髪に青い瞳。また外人だ。この人もファンタジー映画のよくな格好をしている。

いや、それ以前にここはどこなんだ。悠長にかき氷なんぞ食べている場合じゃなかった。

千花の疑問には二人は答えず、勝手に会話が続いていく。

「……………師匠は弟子を取れと言った。だから、召喚魔法で魔力の強い者を喚び出した」

「はあ？ 召喚魔法ってなによ？ ファンタジー小説とかゲームじゃあるまいし」

いくら目の前の男の格好がファンタジーでも、言ってることまでそんなことってある？ ……もしかして危ない人？

そんなことを考えて、千花が目の前の男から更に距離を取る。

『……………なにを言ってるのか分からんな。ひょっとして異世界の者が？』

「そつだ。ここより科学が発達している世界の者だ」

千花の質問を無視して目の前の男と壮年の男の会話が進む。

『……………おまえ、なんてことをしてくれただ。異世界の者を召喚しただと。今すぐ帰すんだ』

「そついうわけにはいかない。この娘には、俺の弟子になってもら

わなければ」

「弟子ってなによ？　なんでわたしがあんたの弟子にならなきゃいけないの？」

弟子って、なにかの伝統芸かなにかだろうか？

なににせよ、アイスを奪われた恨みは深い。こんな男の弟子なんて、千花にはまっぴらごめんだった。

「後で説明する。おまえは少し黙ってる」

「なっ」

そっけなく男に一蹴されて、千花は気色ばむ。

『この娘にも家族や友人はいるだろう。それをこちらの勝手な事情で引き離す訳にはいかないだろう』

「しかし、たぐいまれな魔力の持ち主であることには変わりはない。もう決めたんだ。俺はこの娘を弟子にするぞ」

「魔力ってなによ？　勝手に人を弟子に認定しないでよ」

「黙れ」

男が千花に手のひらを向けると、なぜか彼女は話せなくなった。

な、な、なによこれーっ!?

千花は驚愕に口をパクパクさせる。

『……仕方ないな。おまえが言い出したらどんなに反対しても無駄だとは分かっている。だが、こんな大きな娘を弟子にするのはいろいろ問題があるぞ』

「とりあえず、この娘の部屋は用意する。それでいいだろう？」

『分かった、それでいい。……ああ、その娘の難民登録をするのを忘れるな』

「ああ、分かった」

よく分からないが話は付いたようだ。

それならわたしにも分かるように話して欲しいものだ。そう思っ  
て、千花は二人をじつと見る。

『言語疎通の指輪を渡した方が良さそうだな』

壮年の男が腕を掲げると、その手のひらに指輪が出現する。

なっ、なにあれ？ なにかの手品？

壮年の男が千花に近寄って左手を取ろうとしたので、慌てて彼女は後ろに後ずさった。

しかし、男がなにかを呟いたとたん、体が動かなくなって千花は焦る。

な、な、なんだこれー！？

男は動けない千花の手を取ると、左手の中指に指輪をはめた。

「これで我々の言葉が分かるだろう。……カイル、この少女の沈黙魔法を解け」

あれっ？ 話分かる！

千花が驚いていると、カイルと呼ばれた青年が彼女に向かって短くなにかを呟く。

「……ちよつと、ここはどこなのよーっ！？」

話せるようになったとたん、カイルに千花は叫んだ。

「……もう少し、黙らせておいた方がよかつたか？」

「そう言うわけにもいかないだろう。少なくとも我々には説明責任がある」

うんざりした口調のカイルに壮年の男がカイルの肩に腕を乗せて苦笑する。

「……ここは、オルデリード大陸、ガルディア王国。首都のルディアだ」

「は？ 聞いたことない名前なんだけど」

「それはそうだろうな。おまえからしたらここは異世界だ」

いせかい。異世界。異世界！？

「あはははは、冗談きつついわ」

千花は笑い飛ばしたが、目の前の二人はいたって真面目な表情だ。……すぐには信じられないのも仕方ないだろうな

壮年の男がなにごとかを呟くと、景色が一変した。煉瓦色の屋根が遙か下に見える。

「ちよ、うそっ！ 足、体浮いてるっ」

「ここが中央ルディア市内だ。……おまえ、うるさいぞ」

カイルが眉を顰めるが、地に足が着いていない状態というのは不安なものだ。

「し、仕方ないでしょ。この状態で静かに出来るかつての！」

「まあ、そうかもしれないな。だが、落ちないから大丈夫だ」

壮年の男が苦笑すると、一点を指さした。

そこには立派な白い城。その城を中心としてヨーロッパのような古い町並みが円を描くように取り囲んでいた。

「なにあれ、もしかしてお城？　ここはヨーロッパかなにか？」

「もしかしなくても城だが、おまえの言うようなヨーロッパというところではない」

カイルが千花の疑問を軽く否定する。

「それじゃ、新しいテーマパークかなにか出来たの？」

それにしてもすごい規模だ。日本一大きいと思われる某テーマパークを軽く上回る。

「あれはガルディア城だ。この国の中心。魔法大国の顔でもある」

壮年の男が真面目に説明してくれるが、どうしても違和感が残る。

「さつきから魔法、魔法って……、おかしいんじゃないの、あなた達」

「じゃあ、今浮いているのはなんだ？　さつき室内から移動してきたのは？」

「えー……、手品？」

千花が苦し紛れにそう言うと二人は頭を抱えた。

「ここまで見せて理解できないとはおまえは馬鹿か？」

カイルが心底呆れたように言った。

「なっ、失礼なこと言わないでよね！」

「待て、二人ともとりあえず戻るとしようか。これでは埒があかない」

「……ああ、そうする」

カイルが手を振ると、さつきの場所に戻ってきた。

「あ、あれ？」

「これが移動魔法だ。いい加減理解しろ」

千花が首を傾げているとカイルが冷たく言い放つ。

「この娘の場合、理解したくないというのが正解のようだがな」

「……ならば、理解させてやるまでだ。おいおまえ、名はなんという？」

偉そうに言われて、千花はカチンとくる。

「人に名を尋ねるのなら、まず自分から名乗ったらどうよ？」

「……なんだと。まあ、いい。俺はカイル。カイル・イノーセン。魔術師だ。こちらにいるのは俺の師匠でシモン・ガーランドだ」

魔術師？ やっぱり鳩とか出すあれじゃないの？

「わたしは千花。佐藤千花だよ。そちら風に言えば、千花・佐藤かな」

「テイカ・サトー？」

「テイカじゃなくて、千花！ ちゃんと発音してよね」

「……悪いが君の名前は、この大陸の人間には発音しにくい。良ければテイカと呼ばせてもらっていいかな？」

カイルに比べれば大分人当たりのいいシモンに言われて、千花は不承不承頷く。

なにか納得できないが、発音できないのならば仕方ない。

「まあ、それならしょうがないけど」

「弟子のくせに偉そうだな、テイカ」

「あんたに言われたくないし！ 第一弟子つてなんのことよ」

「おまえには俺の話は聞こえていたと思ったが。おまえの頭はスポンジか？」

「……そこまであんたに言われる筋合いはないんだけど？」

ビキビキと千花の周囲の空気が凍る中、シモンが慌てて言い繕った。

「カイル、おまえは口が悪すぎるぞ。テイカ、この男は言葉は悪いが腕だけは超一流だ。弟子としてそれだけは安心していい」

「とりあえず、おまえが俺の弟子になることはもう決定事項だ。おまえは家に自力では帰れないしな」

「……なんですって？」

到底看過できないことを言われて、千花は挑戦的にカイルを見上げた。

「召喚魔法でおまえをこの世界から喚び寄せた。どうしても帰りたいたら召喚魔法を習得してから帰れ。俺ですら習得に何年もかかった高等魔法だかな」

「ちょっと、勝手なこと言わないでよ！ わたしはあんたの弟子になるなんて一言も言っていないわよ！ わたしは的意思是どつなっちゃんわけ！？」

「はつきり言えない」

きっぱりとカイルが言うのと、シモンが肩を竦めた。

「……こんな男だから、この際、諦めてくれ」

「第一、師匠が城に仕官できなければ弟子を取れと言わなければこんな面倒なことせずにすんだんだ」

「俺のせいかな？ まさか召喚魔法で弟子を喚びだすなんて普通思わんだろう」

シモンが少し情けない顔になる。

千花は今までの二人の話を思い返しつつ、なんとか話を理解しようと努めた。

「……えーと、話をまとめると、ここは異世界でカイルがわたしを召喚魔法とやらで喚びだしたわけね？ それで、その理由は弟子を取ることだったと」

「ああ、そうだ」

千花の確認に、カイルがあっさり頷く。

「それで、わたしが召喚魔法を習得しないことには家には帰れないってことよね？」

「そういうことになるな。まあ、諦めろ」

諦めると言われて、そう簡単に諦められるかっての！

「そうなんだー。ふふふ」

千花はやたらとふふふと笑うと、不気味がるカイルにおもむろに近寄る。そして彼に往復ビンタを思い切りお見舞いした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0634ba/>

---

魔法の国のティカ

2012年1月1日21時53分発行